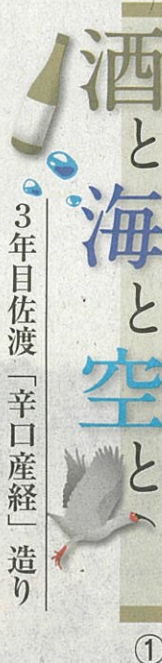


## 産経日曜版



3日目佐渡「辛口産経」造り

①

新潟に赴任して1年。5月麗は10月と遅い。その季節の下旬、初めて佐渡島を訪れ新潟県内は雨が多く、イネがた。2年前から新潟支局の記者が造っている産経オリジナル酒「辛口産経」に使う酒米「越淡麗」の田植えを体験する。支局の先輩記者2人が体験したので、次は自分だと覚悟していたが、いよいよその時が来た。果たして、都会育ちの自分にできるのか、不安な気持ちで佐渡行きフェリーに乗り込んだ。(太田泰)

### 難しい「越淡麗」

フェリーが着いた島東側の両津港は、不安を吹き飛ばすような初夏の青空。心地よい海風を胸いっぱい吸い込み、島中央の国中平野にある農業法人、佐渡相田ライスファームに到着。佐渡相田ライスファームの代表、相田さん(44)は、約17畝の農地のうちの約2・5畝で越淡麗を作付けしている。越淡麗の特徴について、相田さんは「条件があまり良くないので、作る人は多くない」と苦笑する。

理由としては、コシヒカリの収穫が9月ごろだが、越淡麗は10月と遅い。その季節の下旬、初めて佐渡島を訪れ新潟県内は雨が多く、イネがた。2年前から新潟支局の記者が造っている産経オリジナル酒「辛口産経」に使う酒米「越淡麗」の田植えを体験する。支局の先輩記者2人が体験したので、次は自分だと覚悟していたが、いよいよその時が来た。果たして、都会育ちの自分にできるのか、不安な気持ちで佐渡行きフェリーに乗り込んだ。(太田泰)

# 不安の田植え「立派に育て」



米農家、相田忠明さんの指導で酒米「越淡麗」の田植えをする太田泰記者(5月22日、新潟県佐渡市)

## センス褒められにんまり

か。相田さんに勧められ、められ、思わずにんまりして。いよいよ田植え機に乗り込んだ。車体の横に小さな円盤がついており、機械が動くにつれて、機軸が動くと泥に線が刻まれる。その後、車体の先頭にある棒を線に合わせるようにして進むと、まっすぐに苗を植えられる仕組みになっている。おっかなびっくりハンドルを握り、田植え機をゆっくりと前に進める。まっすぐ進んでいるつもりなのだが、平らかな道路と違って田んぼは起伏があるため、すぐに斜めになりそうになる。自分では悪戦苦闘しながら植えたという思いが強かったが、相田さんに「センスはいいですよ」と褒められた。次は、7月中旬に再び佐渡に赴く。佐渡島の地域振興を支援しようと産経新聞社は、尾畑酒造(新潟県佐渡市)の協力で作る「辛口産経」を製造する。3年目の今年には太田泰記者(23)が体験する。

おおた・たい 平成7年、東京都渋谷区生まれ。29年、慶大卒業後、産経新聞社入社。同年5月から新潟支局。趣味はランニング、骨董市めぐり。日本酒は好きだが仕事と体調の都合で控え気味。

